

---

# フェトリアス物語～狼 - Low - ～

稲本 楓希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フェトレアス物語〜狼-Low〜

### 【Nコード】

N7291Y

### 【作者名】

稲本 楓希

### 【あらすじ】

ユースナ暦925年、場所はゼンロ大陸の遙か南にある島国「パレセリア」。

アグノスの街の東に広がる「ソゲンの丘」。そこに建つ教会に住む十五歳の少年・フィルは、リオヤトトといった友達に囲まれて平和に暮らしていた。しかし、その頃街には、近くの森に出没するオオカミの姿をした凶暴な妖魔「ロウ」に関する噂が流れていた。

## 第一章 教会の少年

真つ暗な夜、空には星はなく、ただ満月だけが孤独に浮かんでい  
る。その月明かりに照らされて、森には奇妙な静寂が漂っていた。  
普段なら聞こえるはずの虫の声、木々のざわめき、梟の鳴き声、そ  
ういったすべての音という音が、その森からは消えていた。まるで  
森全体が何かの危険を感知して、息を潜めて身構えているかのよう  
だった。

しかし突然、その静寂が破られた。何かの動物が暴れるかのよう  
なせわしない音が、断続的に森に響いた。木々の間からこぼれる薄  
暗い月明かりの小さな塊が、あちらこちらに暴れながら移動する、  
その音の主をちらちらと映し出したが、それが一体何であるかが分  
かるほどに照らし出すことはなかった。やがてその動物がのたうつ  
ような音は斜面のある方に移動して行き、突然転げ落ちるような音  
に変わった。その音に合わせるように、転げるそれを月明かりが照  
らした。

やがてその動物は森から転げ出て、遂にその全貌が月光の元にさ  
らけ出された。

それは、一匹の動物ではなかった。二匹の動物が、纏れ合って互  
いにつかみ掛かっていたのだった。斜面を転げた勢いで地面にぶつ  
かった衝撃で、纏れ合っていた二匹の動物は引き離された。すると  
それらはすぐに体勢を立て直し、互いに睨み合った。

その片方は、鈍く輝く太くて長い体を持った、体長五メートルは  
あるかという巨大な蛇だった。その二つの目は狂暴な怒りに赤くギ  
ラギラと燃えて、もう一匹の動物を睨みつけている。

そしてもう一匹の動物は、その大蛇の半分くらいの大きさの狼だ  
った。体の大きさでは大蛇に劣るが、毛を逆立たせ、銀色の牙と爪  
を剥き出しにするその迫力は、赤い眼の蛇に対してもまったく退け  
を取っていなかった。ただ、大蛇と大きく違うのは、その眼に怒り

を湛えていないという点だった。

その二匹の動物は、互いに唸って威嚇し合いながら、一定の距離を保って睨み合っていた。どちらも相手の一瞬の隙を逃すまいと眼を光らせながら、物音一つ立てずに少しずつゆっくりと移動して行く。

永遠とも思えるようなその緊張した時間の後、今にも切れそうになっている張り詰めた糸のような狼と蛇の間の空気が、ほんの少し揺らぐ瞬間があった。そして狼も蛇も、その揺らぎを見逃さなかった。

次の瞬間、二匹の動物は、再び纏れ合い、暴れ回っていた。大蛇が鋭い牙がズラリと並んだ顎を大きく開き、狼の首筋に噛み付こうとした。が、狼の方が一瞬早く、太過ぎる鞭のような大蛇の胴体に月光を受けて銀色に輝く、鋭く長い爪を食い込ませた。

すると、奇妙な事が起こった。狼の爪が食い込んだ辺りから、大蛇の体が光を放ち始めたのだ。その光は次第に大蛇の体を包み込んで行き、そして真っ黒だった大蛇の体は次第に形を失い、ただの影になって、闇の中に消えていった。

そしてさっきまで確かにそこに存在した、今はもう跡形もない、黒い体と朱い瞳の大蛇の残像を見つめながら、生き残った狼はその場に座り込み、そして顔を上げて虚しい表情で天に孤独に浮かぶ満月を見上げていた。

暖かな陽射しが差し込む気持ちのよい朝、アグノスの街の南東に広がる黄緑色のソゲンの丘では、小鳥達は心なしかいつも以上にはりきって、明るい声で歌を口ずさんでいるようだった。また、その丘に建つアグノスの教会の部屋に窓越しに差し込む朝日の光も、どいうわけかいつもより明るい色合いに見えた。

しかし、そんな明るい鳥の声も陽の光も、その部屋で眠っている一人の少年の眼を醒まさせる事はできなかった。男にしては長めの、

寝相でボサボサになった灰色の髪を持った十五歳の少年は、その顔に光が当たっているのも構わずに眠り続けていた。

その時、部屋のドアを叩く音がした。しかしその音にも、少年は目を醒まさない。するとドアを開いて、一人の若い男性が部屋に入ってきた。部屋の床には、『本の要塞』とでも形容するのがピッタリだと思えるほどに本が散乱していて、足の踏み場もないほどだったが、この部屋を歩くことに慣れている男性は、いとも簡単にその本の隙間を縫って、少年が寝ているベッドにたどり着いた。

「ほら、起きなよ、フィル」

男性は親しみの籠った優しい声でそう言いながら、少年・フィルを揺すり起こした。

「今日はリオちゃんやトトくんと一緒に街に行く日だろ？」

男性がそう言うと、フィルは微かに眼を開けた。それから少しの間、寝ぼけて何がなんだか分からないような表情をしていたが、やっと男性の言っていたことの意味が分かったのか、ふいに目を開いた。

「…ソール叔父さん、今何時？」

フィルは寝転んだまま、いかにも眠たげな声で尋ねた。

「だいたい8時半つてところかな」

叔父さんが答える。

「…じゃあ、あと十分だけ…」

フィルはそう言って再び眠りに落ちようとする。

「こら、十分も寝てたら朝御飯食べる時間がなくなるじゃないか」

ソールは顔では苦笑しつつ、しかしどこことなく有無を言わせぬ口調で言った。が、まだ眠たくてしょうがないフィルは五月蠅そうに窓側に寝返りを打つ。

「まったく、しょうがないなあ」

ソールは頭の後ろを搔きながら言った。

「それじゃあ、今日のトイレ掃除はフィルに頼もつかないかな？」

「待って、今起きるから」

ソールの言葉に、フィルは即座に反応する。トイレ掃除は、フィルが教会でする仕事の中でも最も嫌いな物だった。普段はソールが嫌がりもせずに請け負ってくれるのだが、フィルが言うことを聞かない時にはここぞとばかりに脅しがわりに使うのだった。

「じゃ、下で朝御飯用意して待つてるからね」

フィルの反応に満足して、ソールはそう言い残して部屋を出て行った。残されたフィルは目を擦りながら、欠伸をしつつ起き上がった。そして大きく延びをして、大儀そうにベッドから立ち上がった。フィルは階段を下りて下の階につくと、まず洗面所に行って顔を洗った。そしてそれが終わるとタオルで顔を拭きながらリビングに向かった。

窓からの日の光に照らされたリビングに据え置かれた、白く塗られた木の四角いテーブルには、ソールが用意した朝食が並んでいた。その日の朝食はパンとチーズで輪切りのトマトを挟んでこんがり焼いたトーストと、湯気を立てている柔らかそうなロールキャベツなどで、そのどれも美味しそうだった。どこで習ったのかは分からないが、ソールの作る料理の味はいつも一級品だった。

フィルが席につくと、それまで自分の朝食も食べずに待っていたソールは待ち兼ねたように、子供みたいに元気な声で「いただきます」と言っただけはじめた。そして、フィルもそれに続いた。ロールキャベツはフィルの好物だ。ソール叔父さんもそれを知っていて、事あるごとによく作ってくれる。それも、ここ最近は回数が増えているようだった。

そしてソールの料理は、いつも通り期待を裏切らなかつた。下手なプロの料理人よりもうまいのではないかと思うほどに、それらがあまりにおいしかったので、フィルはあつという間に全部平らげってしまった。

「…お、もうこんな時間か」

食事を終えてからしばらくして、ふと時計を見たソールが言った。それに釣られてフィルも時計を見ると、今日一緒に街まで行く友達

と落ち合う予定の時間の、ちょうど十分前だった。

「ほら、ぼちぼち出発しないと、また遅刻してリオちゃんに怒られちゃうんじゃないかい？」

ソールに言われて、フィルはダラダラと出掛ける準備をした。自分の部屋に戻って、壁に掛けてあった愛用している襷掛けのバッグを手に取り、部屋のおちこちを掘り返して出て来た必要な物をぞんざいに突っ込んでいく。

どうにも眠気が取れず、思考がはつきりしないまま準備を終えて、フィルはソールに急かされる様に教会を出た。

先ほどソールの話の中にも出たリオとトトは、フィルの幼なじみである。リオは教会の程近くにあるヴェルネ農園というぶどう農園の子供、トトは近所に住む鍛冶屋の息子である。ちなみに年齢で言うと、リオとトトはフィルの一つ上だ。

それらの一家を含む、アグノスの街の郊外であるソゲンの丘に住む人達は、冬になると雪のせいで街に行きづらくなる。だから、毎年秋になると、仮にその次の冬に大雪が出ても大丈夫のように、ソゲンの丘の人々は盛んに街に保存食の買い出しに行くのだ。

今回、フィル達が街に行くことになったのも、そのためである。食料だけに関わらず、服だの本だのと、それぞれ思い思いの物を買っていくのだ。

フィルが三人のいつもの待ち合わせ場所である大きなコルク櫛の下に到着すると、そこには既に他の二人が揃っていた。一人はウェーブのかかった長い赤毛を薄手の上着に垂らした、ベルボトムをはいた少女で、もう一人はボサボサ頭で、Tシャツに長ズボンのラフな恰好の少年だ。

「あつ、来た来た」

赤毛の少女・リオが、フィルの姿を認めて言った。

「フィル、おはよう」

「おはよう、リオ」

リオの挨拶に、フィルも歩み寄りながら応じる。

「よう」

続いてトトも軽く手を挙げて言った。

「トトも、おはよう」

フィルは欠伸を噛み殺しながら言った。

「ずいぶんと眠たそうだな。夜更かしでもしたのか？」

その様子を見てトトが聞いた。

「ん…まあ、ね」

フィルは欠伸のせいで目に涙を浮かべながら、フィルは曖昧に答えた。

「…さて、これで全員揃ったわね」

そこで、場を仕切るようにリオが言った。

「それじゃ、このままここにも意味ないし、早速行きましょ！」

そう言うのが早いのが、リオは待ち切れないように一番に歩きだした。街に買い物に行くときは、買い物好きのリオが先頭に立つのが常だった。そして、リオほどは乗り気でないフィルとトトは、ダラダラとその後が続くのだった。

フィル達の住んでいる場所からアグノスの街までは、大体三、四キロの距離がある。その間は灰色の石で舗装された道で繋がっている。のどかな緑の草原に囲まれたこの道路は、素朴だが牧歌的ではない。かにも平和な雰囲気の人々に好かれていて、ひそかにアグノスの街の名所の一つと目されてもいる。実際、フィルもこの道路は好きだ。特に、街よりも高い高度にあるこの道路から一望できるアグノスの街の風景は素晴らしかった。

「ねえ、ところで二人とも」

道の途中で、リオが口を開いた。

「例の噂、聞いた？」

「噂って、なんのことだ？」

例の噂、だけでは当然分かるはずもなく、トトが聞き返す。

「ゆづべまた『ロウ』が現れたっていう噂よ」

リオがちょっともどかしげに言った。

「ああ、ロウって言えば、ここしばらく森の近くで出没してる、例の化けオオカミのことか」

トトはやっと話が分かって、なるほどというように言った。

「なんでも、ずいぶんデカくて狂暴らしいな」

「そうよ。なんでも、目撃した人によると、体長が二メートル半もあるっていうのよ。そんなのがこの街の近くに棲んでるなんて、怖いよねえ」

リオは道路の右側に広がる森に眼をやりながら言った。その森こそが、『ロウ』と呼ばれる化けオオカミが棲んでいると言われる森である。人々に『闇の森』とあだ名されるその森には、『ロウ』だけでなく様々な妖魔が棲みついているといわれ、最近では誰も近付かなくなっている。そのあだ名のとおり、朝だというのに森はどことなく暗く見える。

「でも、なんだかあんまり実感沸かないけど、アグノスがこうして妖魔に襲われないで済んでるのは、教会があるお陰なのよね。でしょ、フィル？」

リオはフィルに向かって言った。

「…うん、まあ、そういうことかな。邪悪な魂を持つてる妖魔は、教会には近寄れないからね」

フィルは少し間を置いて答えた。

「なによ、その張り合いのない返事は」

リオは少しむすつととして聞いた。

「そういえばフィル、最近ちょっと元気ないわね。調子でも悪いの？」

「別に、調子が悪いって言うほどでもないけど…」

フィルは慌てた様子で言った。

「…なんだかまだ眠気が取れなくて」

「もし、なにかあるんだったら遠慮なく言いなさいよ。私たち、友達でしょ？」

リオはファイルを見つめて言った。リオは昔から友情に厚く、勝ち気な性格も相まって、友達の事となるとお節介なほどに首を突っ込みたがるのだ。

「う、うん、分かったよ。でも、本当に大丈夫だから」

ファイルはどこかあしらうようにそう言うと、リオは少し拗ねたように、

「分かったわよ」

と言って、歩く速度を速めてスタスタと先に行ってしまった。

「おい、ファイル」

その時、トトがファイルに耳打ちした。

「リオを怒らせると怖いぞ」

「分かってるよ。たぶん、トト以上にね」

そう言ってファイルは苦笑した。

第一章・完

## 第二章 ローフ・ペーカー

アグノスの街は、大きな二つの島と、その周りの諸島からなるパレセリアの、東島の北部に位置するアルセイル地方に属する港町である。西側はスリト海に面していて、昔から東島と西島の間貿易路として発展してきたという歴史を持つ街である。

その為にアグノスの街は常に人や物の流通の激しい、多様な活気に満ちた街となっている。

そして、この街の一番の特徴は、街の人々がほぼ例外なく音楽好きだということである。元々は、長い航海を終えてきた人々を歓迎し、彼らの疲れを癒し、また航海の安全を願おうということによって音楽が発展してきたらしいが、いつの間にかやらそれが土地に定着して、独特な文化になってしまったのだと言う。

潮風で傷まないように特殊な塗料で塗られた白い街並みは、起伏の多い地形の都合からあちこちに階段や坂が複雑に連なっていて、どこか巨大な迷路を思わせるような楽しげな雰囲気を漂わせている。そんな複雑な構造のせいで、小さい頃からずっとこの街に慣れ親しんでいるファイルでさえ、一つ道を間違えれば今まで見たこともない場所にたどり着いてしまう事も少なくないのだった。

「ねえ、二人とも、どこか行きたいところ、ある？」

ソゲンの丘を下って、アグノスの街に入る大きなアーチ型の門にたどり着いた時、リオが聞いた。門は普段、昼間の間はずっと開けっ放しになっていて、誰でも好きに出入りすることができるようになってる。

「うーん、僕が用事があるのは図書館だけど、二人とも一緒に来たくはないでしょ？」

ファイルは言った。

「そんなの、当然だろ。オレを図書館なんか連れていってみる、あまりの気持ち悪さに吐くぞ」

すかさず釘を刺すようにトトが言った。トトは昔から本という本がなによりも嫌いなのだ。

「でしょ。だから、図書館には後で一人で行くよ。それで、トトとリオはどこに行きたいの？」

「私はやっぱりケート洋裁店ね。今のうちに新しい冬服を用意しなきゃ」

リオはウキウキした声で言った。

「じゃあ、トトは？」

とファイルが聞く。

「オレか？オレは……」

トトは何故か一瞬言葉を詰まらせた。

「実は親父から、納品を頼まれてんだ。なんでも、お得意先のパン屋のオーブンの金具が壊れたらしくて、そのままじゃ仕事に支障が出るから、できるだけ早く届けてくれって」

「パン屋っていうと、リュムさんのところのことね。そういうことなら、最初にそっちに行つた方がいいかしら？」

「あ、ああ、そうだな」

やはりトトはどこか様子が変だった。

「……どうしたのよ、トト。さっきからちよつと調子が変わじゃない？」

リオは心にもなく詰問するような口調になる。例によってリオのお節介癖が出てきたようだ。それ自体が悪いとは言わないが、リオの場合は気がつくところか責めるような声音になってしまつので、逆効果になってしまう事も少なくない。

「べ、別になにも変じゃねえよ」

トトは慌てて言い繕うが、そのどもり具合がすでにその言い訳の効果を打ち消してしまつていた。

「なによ。もしかして何か隠し事でもしてるの？」

納得できないリオはさらに問い詰める。

「まあまあ、リオ、トトが話したくない事なら、無理に聞かなくてもいいじゃん」

そこにフィルが仲裁に入った。リオもトトも頑固なところがあるから、このままでは堂々巡りになるだけだ。

「…もう、しょうがないわね。それじゃ、とにかくまずはパン屋さんに行きましょう」

本人もその事を自覚してか、リオはむすつとしながらもあえてそれ以上言及はしなかった。

「ありがとな、フィル」

リオが先を歩いているのを見ながら、トトはフィルに耳打ちした。「どういたしまして。でも、実際のところ、いったいどうしたの？」とフィル。

「それは、別に…なんでもねえよ」

トトはどこかばつが悪いような顔をして、ぶっきらぼうに答えた。「ふうん」

フィルはちょっとした悪戯心に駆られて、わざとらしく納得したふりをして見せた。するとトトは、少し怒ったようにそっぽを向いてずんずんと先へ進んで行ってしまった。

リュムという名の女性が経営するパン屋『ロウフ・ベーカリー』は、街の中心にあるミロディ広場のすぐ近くにある。広場に来るといつもどこからか漂ってくる、香ばしい美味しそうなパンの香りは、このパン屋から流れて来るのだ。

ミロディ広場は中心に噴水が据え置かれた直径百メートルほどの丸い広場で、街に住む人々にとっては暇な時間を過ごすかけがえない憩いの場であるのと同時に、街全体で何かの行事があるときの集会場にもなる。それ以外の時は、音楽好きな街の人々が気ままに音楽を奏でたり、近所の中年層の女性達（俗に言うオバちゃん）が井戸端会議を開いたりしていて、平和でのどかなムードを醸し出している。

フィル達は口ウフ・ベーカーリーに行く途中で、このミロディ広場を通り掛かった。すると、広場にはいつも通り噴水のさらさらという音とともに、音楽家達が気ままに奏でる音楽が流れていた。

広場を通り過ぎる途中で、ふとフィルは足を止めた。近くで二人のオバチャ…もとい、奥様方が世間話をしていた。

「…ねえ、ちよつと聞いた？ 闇の森にまた『ロウ』が出たんですってねえ」

「本当、世の中も物騒になったわねえ。いくら教会の力で守ってくれるって言われても、やっぱり怖いわよね」

「それだけじゃないわよ。ほら、この街って東西の貿易のお陰で成り立ってるじゃない？ うちの主人も貿易商をしてるんだけど、最近、妖魔が怖くて取引先が尻込みしてるらしいのよ。これじゃ、商売上がったりだわ」

「せめてフェルネル教団が、もつとちゃんと頑張ってくれると良いんだけどねえ…」

フィルはその世間話を、どこか複雑な気持ちで横から聞いていた。「ちよつと、フィル、何してんのよ」

その時、遠くからリオが呼ぶ声が聞こえた。フィルのせいで足止めをくらったせいで、少し苛立っているようだ。

「…ごめん、なんでもない」  
フィルはそう言うと、急いでリオ達の方に走って行った。

「まったく、勝手にいなくなったら、ビックリするじゃない」  
フィルが追いつくと、リオは責めるように言った。

「リオ、フィルがちよつと立ち止まったくらいでそんなにガミガミ言うなよ。そんなんじゃないつまで経ってもカレシできないぜ」  
とトト。

「う、うるさいわね。べ、別にカレシなんか、欲しくもないし」  
そう言うリオは、完全に動揺していた。

「…ってどうか、恋に落ちたこともないトトに言われたくないわよ」  
「へえ、じゃありオは恋に落ちたことがあるのか」

調子に乗ったトトは揚げ足を取ってからかう。

「え、それは…！」

リオはドキッとしたように言葉を詰まらせた。

「へえ、あるんだな。いつたい相手は誰なんだ？」

トトはさも面白そうに言う。

「そ、そんなの、トトには関係ないでしょ！」

リオはブンブン怒って言い返した。

「はいはい、二人とも、そこまでしなよ」

トトがなおも付け入ろうとするので、仕方がなくフィルが仲裁に入った。一応、本人達のために誤解がないように言うておくが、二人は仲が悪いという訳では全くない。むしろ、よく言う『喧嘩するほど仲がいい』という間柄なのだ。フィルはただ、それに付き合わされる第三者である自分が気疲れするから、仲裁に入っただけである。

「それより早くロウフに行くんじゃないかったの？」

フィルが言った。

「あつ、そうよ」

それを聞いてリオは思い出したように言った。

「元はといえば、フィルが勝手に立ち止まったのがいけなかったんじゃない！」

怒りの矛先が、一瞬でフィルに方向転換した。

「そ、それじゃあ、僕は先に行ってるから！」

身の危険を感じたフィルは半ば叫ぶようにそういうと、急いで広場を逃げ出して行った。

「まったく、フィルったら…」

逃げ出すフィルを見ながら、リオは腕を組んで呟いた。

「あ、もしかして…お前が好きなのって、フィルか？」  
とトト。

「な訳無いでしょ」

さっきまでの慌てぶりとは打って変わって、その問いに対してだ

けは、リオは恐ろしいほど冷めた声で即答した。そしてちらつとトトを睨むと、プイッと顔を逸らすのだった。

「あら、いらっしやい、フィル君、トト君、リオちゃん」

ロウフ・ベーカーリーに入ると、カウンターの奥から、三角巾と赤いエプロンを着けた背の高いロングヘアーの若い女性が挨拶して来た。彼女が、この店のオーナーのリユム・トルキアスである。そこでフィル達も口々に挨拶を言った。

「あ、もしかして、トラスさんに頼んであった金具、届けに来てくれたのかしら？」

トトの顔を見て、リユムはふと合点がいったように聞いた。

「ああ、そうなんだ。困ってるだろうから、なるべく早く届けてやってくれって、親父が…」

トトはそう言いながら、背負っていたリュックサックから巾着を取り出した。そしてその中から棒状の金具を取り出した。どうやら、閉じたオープン蓋の蓋を固定するための棒のようだった。

「ほら、これで間違いないか？」

「わあ、ありがとう。本当に助かったわ」

カウンター越しにトトから金具を受け取ると、リユムはほほ笑んで礼を述べた。

「そうだ。お支払いをしなくちゃね。いくらだったかしら？」

「あ、いや…」

トトはそう制すと、ちよつと誇らしげに鼻をこすった。

「実は、その金具、オレが作ったんだ。見習いが作ったやつは、タダでいいんだ」

「えっ、コレ、トト君が作ったの？すごい！」

リユムはまるで子供のようにはしゃぐ。

「ま、まあな」

トトは照れ臭そうに言った。あまりに有頂天になっていたせいで、その時後ろから、リオの突き刺すような視線が飛んできていた事に

は気づいていなかった。

「…どうしたの、リオ？」

トトとリュムのやり取りを後ろから眺めつつ、ファイルは明らかに様子がおかしいリオを気遣って尋ねた。

「ファイルは黙ってて」

気遣ってくれたファイルには一瞥もくれず、リオは二人を冷めた目で睨んでいた。

「…なによ、トトだったら、デレデレしちゃって…」

少しすると、ファイルに聞こえている事も気付かずに、リオが険悪な声で呟いているのが聞こえてきた。

「リオ、もしかして…ヤキモチ？」

ファイルははっとして聞いた。

「え…ち、違うわよ！断じて違うわよ！だって、私がトトにヤキモチ焼く理由なんかないじゃない！ねえ！？」

リオはさっきまでとは打って変わって、真っ赤になって言った。

「ふうん、なるほどね」

ファイルはにやっとして言った。これですべての辻褄が合った。そして、続けて言った。

「僕は、お似合いだと思うよ」

「ちよっと、ファイル、勘違いしないでよね！私は、ただ…ただ…」

リオはすぐに言い訳しようとしたが、うまい口実を思いつけなかったのか、言葉を詰まらせた。そして、その事で余計にはつが悪くなる。

「大丈夫だよ、トトに告げ口なんてしないから」

ファイルは苦笑いして言った。

「え、ホントに！？……あ」

つい口を滑らせてしまった事に気付いたリオは、咄嗟に口に手をやった。今の話が聞かれていないかどうか確認するために、トト達の方に目をやる。幸運にも、トトとリュムは金具の調子を見るため

に、オーブンのある厨房に入っているところだった。

「…フィル…ホントに…トトにはらしたりしたら、ただじゃ置かないからね…」

「…はい…」

ただならぬリオの様子に、フィルはそう答えるしかなかった。

第二章・完

### 第三章 フォナル図書館

「さてと、それじゃ、ファイルはこれから図書館に行くんでしょ？」  
オーブンの金具の受け渡しが終わわり、三人がロウフ・ベーカーリーを出ると、リオが聞いた。

「うん、そういう事になるかな」とファイルは答えた。

「…それにしても、お前、いつも図書館でなに調べてるんだ？」  
続けてトトが不思議そうに尋ねる。

「え？まあ、それは…ちよつとね」

ファイルははぐらかすように言った。そして話を逸らそうと、続けて言う。

「それより、トトはどうするの？もう用事は終わったんだろ？」

「ああ、そうだな…他にやることも思い付かないし、どうするかな」  
トトは答えた。

「それなら、リオが洋服買いに行くのについて行ってあげたら？」

トトの返答を見越していたファイルが提案する。リオがちよつと驚いてファイルを見たので、ファイルは意味ありげに目配せした。

「なんでオレがリオのお守りしなきゃいけないんだよ」  
と不満げな声でトトが言い返した。

「それがいやだって言うんだったら、僕と一緒に図書館にでも行くかい？」

「リオ、こんなガリ勉はほつといて、さっさと行こう」

ファイルの言葉に悪寒を感じたのか、不気味な物から逃げようとするかのように後退りしたトトは、口早に言った。そしてリオの腕を掴んで歩き出した。

「それじゃ、ファイル、お昼頃にまたここで会いましょう！」

リオはトトに引つ張られながら背中越しにファイルを見て、心なしか上機嫌な声で言った。そしてウィンクをすると、トトと一緒にそ

の場を去って行った。

「…さてと、」

ファイルは頭の後ろを掻いて言った。

「僕も、自分の仕事を始めるとするかな」

そう一人ごちて、ファイルは今回街に来た目的である図書館に足を向けた。

アグノスの街唯一の図書館・フォナル図書館は、街の南東の端っこだであるシーヤ地区にある。賑やかさが一番の売りであるアグノスの街の中で、この南東の一角だけは例外的に閑静で、のどかでゆったりとした時間が流れている。たぶん、この静けさは、街の端に位置するために人家が少なくなり、反比例的に緑が多くなったという歴史的背景に起因するのだろう。

南東から射す日の光りが、道路の上をアーチ状に囲むほどに巨大に成長した街路樹を通して、木漏れ日となって降ってくる。そしてそれに、紅葉によって黄色く染まっている街路樹の葉がマッチして、幻想的な風景を作り出している。

そんな道路の突き当たりに、フォナル図書館はあった。赤いレンガが積み上がってできた、教会にも似た形をしているその建物は、見ている不思議と安心感が湧いて来るので、フォナル図書館は、自分の家でもある教会を除けば、ファイルがもつとも好きな場所だった。図書館に入るとすぐの所にカウンターがあった。そこではほっそりした中年の女性が椅子に座り、机に開いてある帳簿に何かを盛んに書き込んでいた。そして何かを書き入れる度に、自分の右側に高く積み重ねた本を左側のワゴンの中に並べていつている。知的なメガネをかけた、いかにも真面目そうな顔をしたこの女性は、フォナル図書館の館長兼司書のヴィエラ・クイルスである。

「こんにちは、ヴィエラさん」

ファイルが声をかけると、ヴィエラはそれまでならめっこしていた帳簿から顔を上げ、ファイルを見た。

「こんにちは、フィル・トワイライト。またソールさんに頼まれて来たのですか？」

グイエラはカチャツとメガネの位置を正しながら、淡々とした声で聞いた。

「はい。それでまた、資料室に入らせてもらいたいです」

とフィルは答えた。フィルの言う資料室とは、この図書館の二階にある、人間を襲う邪悪な存在・妖魔に関する様々な資料を納めた書庫の事である。フェルネル教団に属する使徒の一人として、敵である妖魔について研究しているソールは、自分の研究の為に、度々その資料を借りるのだ。

「いいでしょう。もともとあそこにある資料は、アグノス教会の前の建物にあったものを、この図書館が預かっているだけです。御自由にお持ちなさい」

そう言っつてグイエラは、カウンターの引き出しを開けて、資料室に入るための鍵を探していたが、不意に何かを思い出したように顔を上げた。

「ああ、思い出た。今、ニーナが資料室に入っているから、鍵は空いているはずよ」

「分かりました。それじゃ、行ってみます」  
そう言っつと、フィルはその場を後にした。

フィルが図書館の奥にある階段を上り、二階につくと、そこは分類にいくつもの部屋に分けられた書庫の入口が並ぶ廊下になっていた。その中でも、一番奥にある書庫が、妖魔の資料室である。

フィルがその、いかにも重たそうなドアノブを押すと、確かに鍵は開いていたようで、ドアはゆっくりと内側に開いた。

資料室は、開け放たれた窓を通して入ってくる日光によって白っぽく見える所と、影になって真っ暗になっている所とがはっきりと分かれていた。そして、その白くなった部分には、誰かが雑然と積み上げた本によって、見事なまでに堅牢な『本の砦』が出来上がっ

ていた。

フィルは、自分の肩ほどまでの高さの砦の中を覗き込んで、言った。

「おはよう、ニーナ」

中には、本人の胴体くらいもある巨大な本に没頭する、大きな四角いメガネをかけた小柄な少女が座っていた。突然頭上から声が降ってきたので、少女は文字通り飛び上がった。その時、少女の肘が本の砦の内壁にぶつかった。すると、絶妙に保たれていた砦のバランスが一気に崩れて、砦を構成する大量の本が、フィルに雪崩かかってきた。一瞬の後、あわれフィルは本の下敷きとなっていたのだった。

「あわわ、フィルさん、大丈夫ですか!？」

覆いかぶさる本越しに、少女・ニーナの声が聞こえた。それに続いて、ニーナが本を掻き分ける音も聞こえる。

少しして、体が動かせるくらいに本がどかさされると、フィルはバサバサと本を振り落としながら、崩落現場を脱出した。

「ごめんなさい、フィルさん!」

ニーナは自責の念でやり切れなさそうな声で謝った。

「わたし、本に夢中になつてると、周りの音に敏感になっちゃうんです。そこにフィルさんが声を掛けてきたものだから……」

「いいよ、そんなに気にしなくて。そもそも、突然声をかけた僕も悪かったんだし」

ニーナがあまりにも深刻な、済まなさそうな顔で謝るので、フィルは慌てて言った。

「それにしても、ニーナも物好きだね。僕やソール叔父さんみたいに、教団の関係者として勉強するためならともかく、趣味で妖魔の資料を読むなんて」

「えっ…あ、それは…まあ」

ニーナは自信なさ気に答えた。

「わたしって、変わり者だから……」

「別に、そういう意味で言ったんじゃないよ。ただ僕は、小説とかを読むのは好きだけど、資料みたいなのはそんなに好きじゃないから、ニーナってすごいなって思ってた」

フィルは言った。

「すごい、ですか…?」

ニーナはおずおずと聞き返す。

「うん。だってニーナって、どんな本を読むときでも、すごく生き生きしてるじゃん。僕もそんな感じに資料を読めたら、勉強も苦じゃなくなるのになって」

フィルはそう言って苦笑した。

「…さてと、僕は妖魔の資料を探さなきゃ!」

「あおう、わたし、手伝いましょうか?」

ニーナは控えめな声で言った。

「え、いいの?それは助かるよ。『セルペンテ』っていう妖魔の事を調べたいんだけど」

フィルがそう言うと、ニーナはちらつとフィルを見た。

「…確か、蛇の姿をした妖魔ですよ。それだったら、妖魔全書の五巻あたりとか…」

ニーナは右の人差し指を下唇にあて、考え込んで言った。

「まさか、全部覚えてるの?」

「そうじゃないんです…妖魔全書は、名前順になってるから、そこから推測したんです」

「なるほどね。それで、妖魔全書の五巻って、どこにあるか分かる?」

そうフィルが尋ねると、ニーナはおもむろに、崩壊した『本の背』を指差した。

「ありやりや…まあ、どっちにしても、これは片付けないとね」  
フィルは頭の後ろを掻きながら言った。

「ちょっとトト、私がこんな服を着る訳がないじゃない！」

リオはそう言って、ハリセンでトトの頭をひっぱたく。

「いってえな、服一つ勧めただけでなんで叩かれなきゃいけないんだよ。つか、そのハリセンどっから出したんだよ!？」

トトは叩かれた頭を庇いながら言う。

「だいたい、この服のどこが悪かったんだよ？」

「私はね、そういうモコモコが何より嫌いなよ!そんなの、言われなくたって分かるでしょ？」

リオはトトが手に持っている服の、襟や袖口についた羊毛のモコモコを指差して、不満げに言う。

「分かるわけないだろ!以心伝心じゃあるまいし」

「察しなさいよ、こっ、雰囲気で!」

「なんだよ、そのムチャ振りは!」

トトは呆れて言い返す。

「大体、なんでオレがお前の服選びに付き合わなきゃならないんだよ。せつかく服を勧めてやったのに、そうやってカリカリ怒るんだったら、オレはもう帰るぞ」

「え、そんな…ちょっと待ってよー!」

トトが本気で店を出て行くこうとするので、リオは慌てて引き止めるのだった。

「ところでフィルさん、セルペンテの何を調べるつもりなんですか？」

ニーナは崩れた本を棚に戻しながら、何気なく尋ねた。

「え?ああ、それは…彼らがどんな場所に『巣』を作るのかが知りたいんだ」

フィルは答えた。

妖魔には、姿も力も巨大な『親』と、その親から生み出される『子』の二種類がいる。教会の名の元に妖魔を退治する『被魔師』が

妖魔を浄化して倒すときは、いくら『子』を倒しても、その『親』を倒さないかぎり、『子』を増やされつつけてしまうので、その根源を断つために『親』が潜んでいる『巢』の位置を調べることが重要となるのだ。

「そうですね…でも、どうしてフィルさんが、そんなことを？」

ニーナは首を傾げて聞いた。被魔師であるどころか、直接妖魔と関わることもないフィルが、何のためにそんなことを調べるのか、と疑問に思うのは、ごく自然なことだった。

「まあ、ちよつと興味があつてね」

フィルは曖昧に答えた。

「それに、最近闇の森に、セルペンテが棲み着いてるみたいだから、念のためにね。こういう情報が、いつ必要になってもいいようにしておかないと」

「え、そうなんですか？」

ニーナは驚いたように言った。

「知らなかった？」

フィルは振り返って聞き返した。

「はい…だって普通は、妖魔が出たら大騒ぎになるじゃないですか。でも今、セルペンテが出たなんて噂、流れてませんよね」

ニーナは少し訝るようにフィルを見た。

「…あの、もしかして、フィルさん…」

「あ、あつたあつた。妖魔全書の五巻！」

その時ちよつど、大分片付けられた崩落現場から、目的の本を発見して、フィルが嬉しそうに言った。ニーナは突然のフィルの声にびくつと驚いて、喋ろうとしていた言葉は尻すぼみにどこかへ消えて行ってしまった。

「さてと、セルペンテは…あつた！ニーナの言う通りだ」

早速セルペンテの頁を見つけると、フィルは自分の欲しい情報を見つけようと、文章を斜め読みした。

頁の左上には、セルペンテの文字ととぐるを巻く蛇のスケッチが

描かれている。その下には、平均的な体格などが記されている。そして、右の頁から数頁に渡って、文章による説明が綴られている。「えーっと、『セルペンテは、地面に長い穴を掘り、そこに巣を作る。巨大な体を持つセルペンテの巣は、広い土地を必要とする。また、身近に餌があつて、人間から見つかりづらい森を好む習性がある。したがつて、巣を作るのは地下に充分な場所があり、かつ邪魔になる大木などのない、森の中の広い空き地である』か…セルペンテの親は体長が十五メートルもあるから、闇の森で巣を作る場所はかなり限定されることになるかな」

フィルは独り言を言いながら、パターンと本を閉じた。

「手伝つてくれてありがとう、ニーナ。お陰で早く見つかったよ」

「いえ、そんな…わたしの方こそ、フィルさんに本をぶちまけちゃつたりして、すみませんでした…」

「だから、それは気にしなくていいって」

フィルは手を振つて言った。

「それじゃ、さっさと残りの本を片付けちゃおう」

そう言つて苦笑するフィルを、ニーナは意味ありげに見つめるのだった。

### 第三章・完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7291y/>

---

フェトレアス物語～狼 - Low - ～

2011年12月5日18時50分発行